



18
447
7-5

清拙道人詩集

每飽三友圖會

全部
六冊

文續集藏



三賊因會序

浪花曉鐘成子一日偶余が寓居を訪らるるに著述不乃三賊因會成推りきん本つて序を余所り乞ふ巻成らひてこれを見ずん顧乗謙が三友圖會及寺場氏の和漢三友圖會等乃意尔働つて滑稽酒落れ此妙成畫也利其書は一絶ハ臺曲

舞^ぶ曲^{まが}陰陽良妓^{いんりやうりやう}魂膽義^{たまご}を論^{ろん}上^{うへ}有^う頂^{てい}
天文^{てんぶん}天象^{てんさう}より中^{ちゆう}ハ社土^{しゃど}北國^{ほくこく}西南^{せいなん}乃^{なり}妓客^{ぎきゃく}氣^き
國^{くに}の奇人^{きじん}下^{しも}ハ後園^{ごえん}の草木^{くさき}石類^{いしるい}家畜^{けちく}禽獸^{けいじゆ}
所饌^{しょけん}の穀類^{こくるい}菽豆^{しゆくとう}酒菓^{しゆくわ}塩醬^{えんじやう}乃^{なり}制^{せい}表^{へい}至^{いた}るやで
詳^{てい}悉^{しつ}子^しあれを辨^{べん}ず余^よ卷^{まき}をまて歎^{なげ}日^ひ鳴^な呼^こ
奇^き哉^や妙^{めう}哉^や此^こ書^{しよ}蝸^こ牛^{ぎゆう}角^{かく}上^{じやう}の擊^う劔^{けん}子^し何^{なに}ら^ら益^{えき}鐘^{かね}
成^{なり}子^し親^{おや}の實^{じつ}地^ぢを踏^ふんで志^しるところを子^しのそ

世^よの腐^く儒^{にゆう}頭^{かぶ}巾^{きん}深^{ふか}衣^い門^{かど}戸^{かど}を張^た大^{だい}小^{せう}一^{いつ}て徒^た舟^{ふね}を
襲^{おそ}め隠^{かく}几^い正^{せい}坐^ざ以^{もつ}て空^{くう}理^りを後^ごく名^な教^{きやう}育^{いく}
益^{えき}なきもの比^ひ不^ふあらず又^{また}郷^{きやう}愿^{えん}老^{らう}爺^やの放^{はう}逸^{いつ}少^{せう}
年^{ねん}を教^{きやう}務^むまる不^ふ異^いなりそのいふところ人^{ひと}の骨^{ほね}髓^{ずい}中^{ちゆう}
徹^{てつ}く躬^{こん}自^じ性^{じやう}日^{にち}此^こ不^ふ善^{ぜん}を悔^{くわい}で遂^{つい}不^ふ謹^{きん}愆^{けん}郎^{らう}と成^{なり}
然^{しか}らば是^{こゝ}なるはち鐘^{かね}成^{なり}子^し此^こ行^{ぎやう}に於^おるや六^む世^{せい}教^{きやう}子^し
益^{えき}何^{なに}ら^ら効^{きう}善^{ぜん}乃^{なり}一^{いつ}端^{たん}と子^しへ見^み者^{しや}をいめハ

あつとくやよれまゝにこそ
解頤流涎笑而不已笑已これ
を熟閱セバ必ぞこれを
奉^{たいまつ}して金科玉條とせんと
志^まりし

文政四歲次童光荒落無躬日

東都自多樂齋

真銘終言七盛撰



ア一ロ二

凡例

- 一 此書ハ遊客花街ニ戯レテ散賤ヲナス^{コト}又ノ一二ヲ^{アツマレ}
- 天地人ノ三才ニ附會タル洒落ナリ
- 一 浮氣客ノ意得トモナラバ是禧ナリナラヌ^{トコロ}取ガ本^チ
- 々ノ^{コト}又ニシテ左而已毒ニモ^シ藥ニモナラヌ^{レヨ}又書日ナリ
- 一 無飽三賤圖會トハ遊客晝夜散賤ナストイヘ^ハ
- 飽^{アツ}更^{コト}無^{ナキ}ガ故^{コト}ニ^{カク}斯^{ダイ}題ス
- 一 散賤ノ文字ヲ三賤ト書ルハ早春發兌ノ冊ニ賤ヲ^ハ
- 散ストハ吉左右宜カラズト書肆ガ需ニ^モ應^ウジ散ヲ

三ト書ヨリ

一 都而廓中ノ説多カ故ニ此ニ洩レ日追テ廓中

本草ト題シテ別ニ著ス故ニ只余ノ遊里ノ古ノミ

ニシテ廓中ノ趣意ナレ疑フ更ナカレ

一 是粹書ト云ヘル程ノ粹ニモアラス中ニ粹有粹有

何が粹ヤラ不粹ヤラ副子バ眞實モ嘘トナリ賣子ハ

粹書モ野暮ト在惣テ冊中愚考ナレ上ニ急作ナレバ

定メテ誤言多カルベシ閱スル客其誤ヲ知テ誤ヲ

言ス只宜々ト評判アラバ是僕カ為ノ粹ナリト云

魚飽三賊圖會卷第一目錄

天部

魂 膽 義 之 圖 九天 苦 界 之 圖 苦 界 之 説

日 暈 月 流星 星 銀 河

拳 流 星 敵 女 星 彗 星

虹 蜺 雷 雲

風 否 嵐 雨

袖 時 雨 空 泣 雨 雪

露つゆ 露つゆ之銀ぎん
瑠璃るり之露つゆ

甘露かんろ

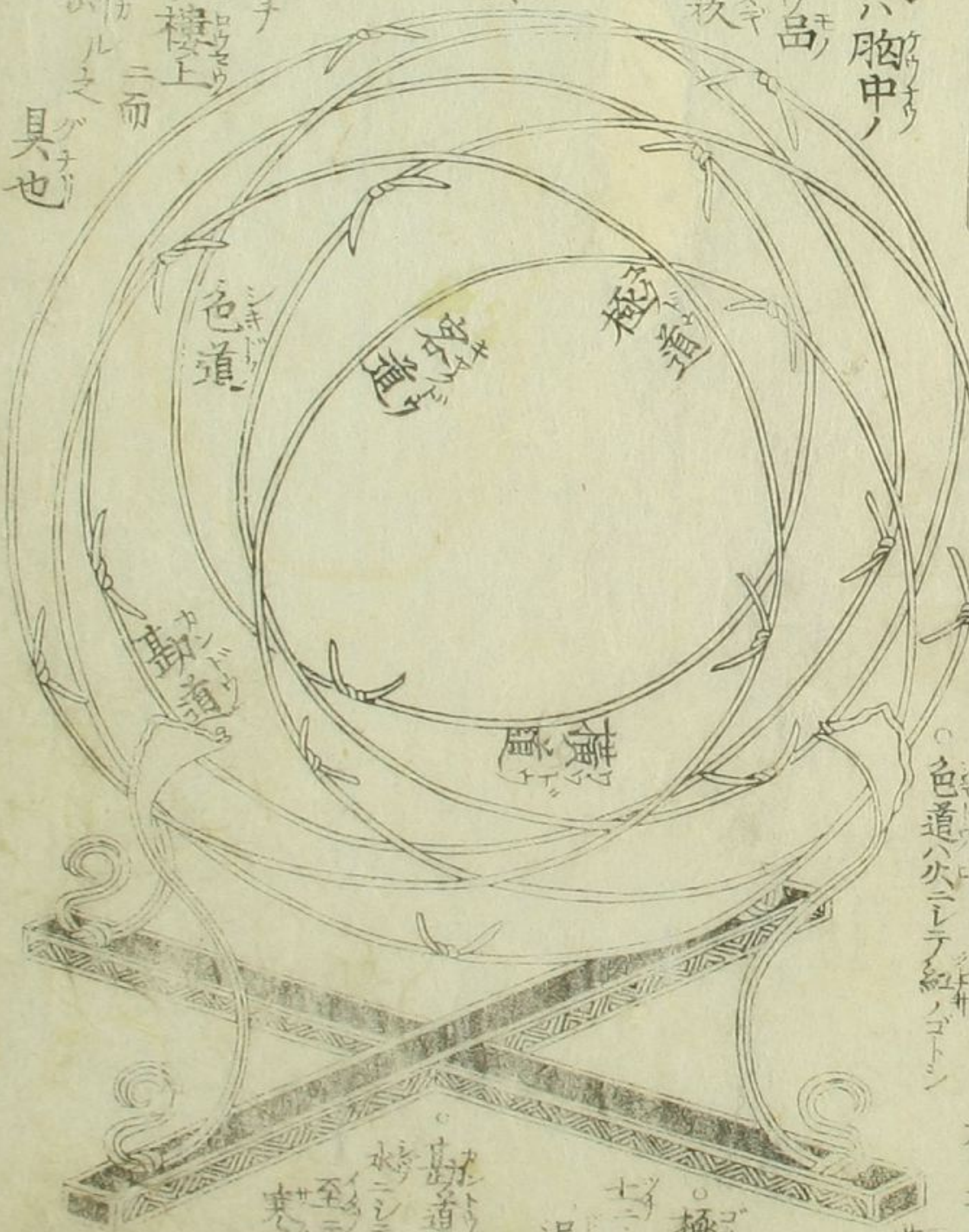
花はな之露つゆ

演コウ舌ゲツ

○天文二十八宿時候。曆日吉凶人倫。
藝財樂器結布。龍蛇鱗魚土地。
山水金火之類。諸方ノ妓婦ヲ外夷。
人物ニ見立果穀類ホニ至ル迄モレ
タルヲ集メ後廿備ニ著シ迄日出ス。

魂コン膽タン義ギ之圖ツ

魂膽儀ハ胸中ノ
吉凶ヲ占ウニ
ニホクニホクニ
延ノボ延ノボ延ノボ
結ユヅ結ユヅ結ユヅ
解トケ解トケ解トケ
輪ワ輪ワ輪ワ
吉キチ吉キチ吉キチ
凶キウ凶キウ凶キウ
客道キョクドウ客道キョクドウ客道キョクドウ



九ク道ドウ

客道ハ金ニテ丸ヲカサ。横道ハ木ニテ
色道ハ火ニテ紅ノトシ

極道ハ如ニ如ニ如ニ
泥ニ泥ニ泥ニ
水ニ水ニ水ニ
東ニ東ニ東ニ

有り時々鐵漿付星袖詰星出る支あり其象色赤く強
飯の如く一度くいつる時へ客道小障りて其氣これが為
狂ふ故不順ありと云

○牽頭天是騷動天有頂天の真中ふして曇鈍星出
陽氣の色を發し震動するを騷し其象太鼓のど
物真似星散形星極道の方をあらうと云

○男色天ハ陽ハして陰あり俗小穴道と云其色帽子の紫
して僧客が緋衣の赤を棄ふ

○白暮天其色白めきたる内小黒さあり黒めける内小白と有

其黒白まらびと

○中居天一晝夜とも小酒月の遠小随ひ閨室を執あつる
其色春ハ紅藍の最舞の如く復小至つて此象小室は宙小有
て陰陽兩段の氣を兼る故小宙居天と云

○夜發天ハ苦界中の下ふして晝見あるとなり黄昏より其
色を發し地小近き直僅と延一重三十穴余を過びて交る
此間惣々朦朧たる闇雲あり眼孛星此取を主とる

○日ハ太陽の精ふして人の首の象ふして照も直鏡の如し
日中ハ鳥あり陽氣の主なる故陽鳥と云又可愛鳥嬉鳥と号

陽鳥 やうがう
金鳥 きんこう



日 ひ

故不約をとりて粧ひ立る若色を失ふ則其国の衰微ありべし
又日中鳥見主不明乱国と是則日中の鳥を見者心を棄れ
国家の傾くをも不知が故あり

日毎小羽の毛を摩り
蘭奢の香とまの瑠璃
珊瑚珠金銀を以てて
故に金鳥の名有
三才圖會云日亦無
光失色国不昌と

月 つき
月 つき
月 つき



月 つき

弦を張がど一故小弦月の名あり此中上弦下弦のよりち有
上弦に至る光つ下弦の光ある一
下弦に正六の両月
當つて大色をうなる是客星の弦をたると云月の中

月ハ正六の両月を紋
日月とあつて其餘紋
月毎月あんど此兩
月小過む此月傾星
客星小迫る客星氣
を張支恰もあとの

桂の木ありと云る説有るれ正六の西月ひるがけの花盛あるが故あり
 正月いちがつの花爛熳はならんまんころの三月二日さんがつにじつ客星色きやくせいしきを變へんじ六月ろくがつの花燃もく
 たる七月十四日しちがつじゅうしつ客道きやくどう迫せまる兩葦りやうしとも陰いんをり月つき星氣せいきを
 ふさぐ故月ゆづりつきの鬱ふさと云然れども翌朝あしたあさ小至せうしつ陰氣いんきの雲くも忍しのみ
 暗くらく客星耀きやくせいこうをこるつ古又平日こまたへいじつみかりつひら曠野ひら不出いるが如ごとし
 傾星けいせい和名わな災星さいせい陽中やうちゆうの火ひを主つどる故ゆゑ一回光ひとひかりを放はなつ時金ときかねを
 主つどる客星きやくせいをこるゆゑ其象そのしやうの真まを見み又稀またま也或説あるいひ云いく
 卵子らんごの角かくあるが如ごとしとも又辛しん鮭さけの晴はのどどしとも生貝なまがひの真ま
 珠たまのどどしとも其真そのまことの象しやうもちつつしし圓見まゆれども圓まううば
 珠たまのどどしとも其真そのまことの象しやうもちつつしし圓見まゆれども圓まううば

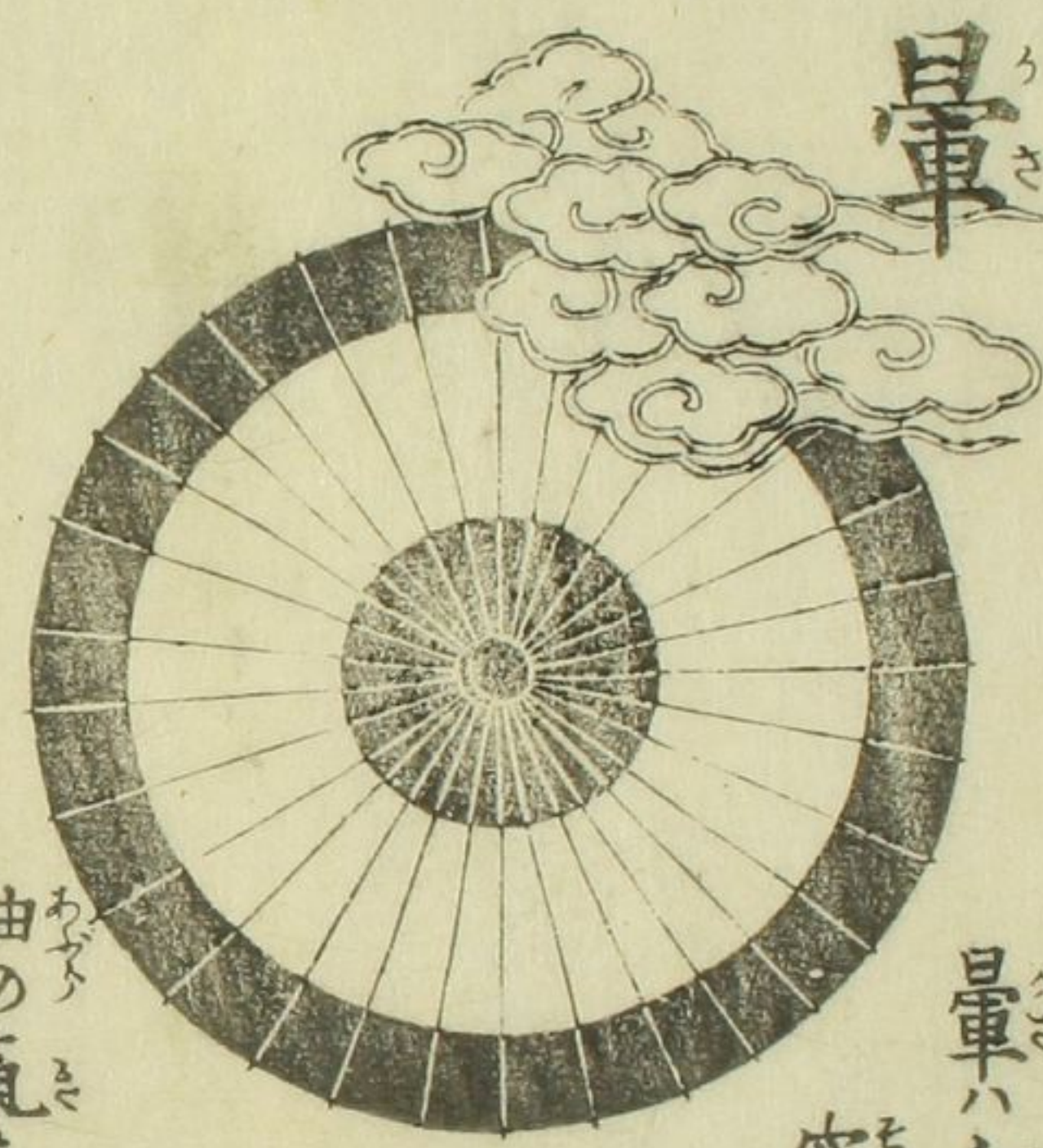


無なく夏なつくももびとと何なんもも西星せいせい也なりきつれども客道きやくどうより此こゝ
 實じつを見みんと心こゝろを費つやや者もの數かずをままげ又星隕せいふん成石なりしと云いる
 夏なつあり此星間夫このほしまはぶの界かい小ちあり落おる夏なつ有あり是石こゝろの例れい小墮ち入いる

堅見かたみあれども堅かたううば
 其出そのでるとあらも夜毎よごと
 うりりく定さだまれる夏なつ
 ちち又七なな成盛大人なりなりおとなの言こと
 傾星けいせいの真まハ角かく錢せんの如ごと
 一ひと有あり

如くして浮く上る夏あり一前漢外戚傳いまく一顧傾人
 城再顧傾人国と有故小災星ともく此難を慮の傾国星
 光赫くの地小趣く夏あり

暈



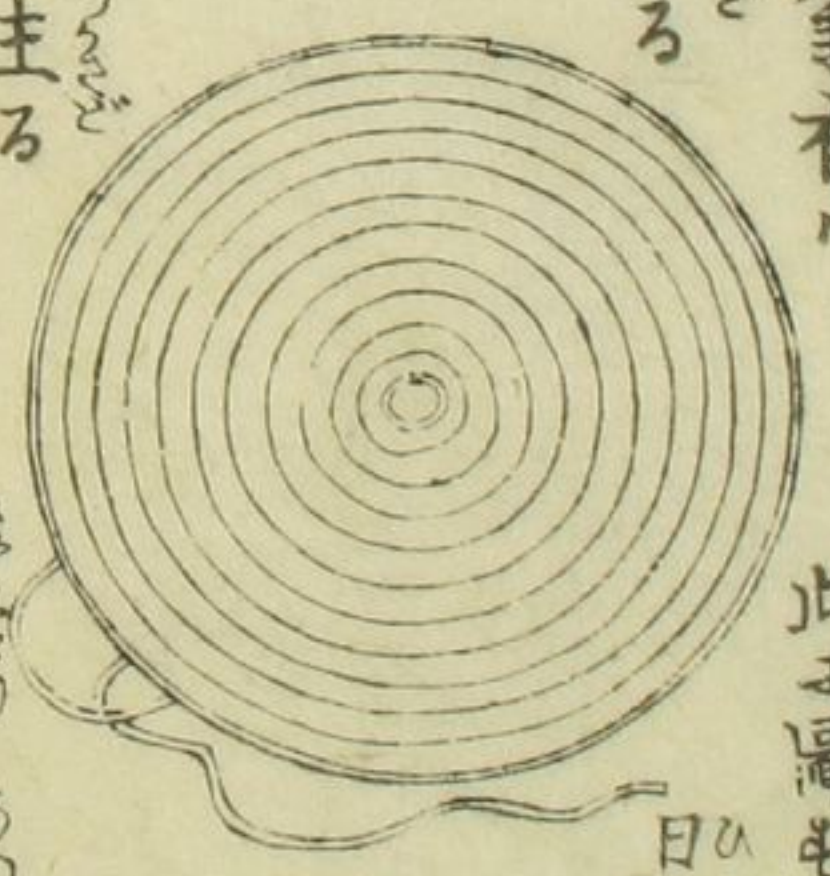
暈ハ文字傘也

空ハ油の氣有リ

雨を主る

暗を主る

油の氣あさハ



此ハ圖も

日の笠

也

客道小有テ

其象數

ア一ノ五

流星

彗星

奔星

天狗星



客星

傾星

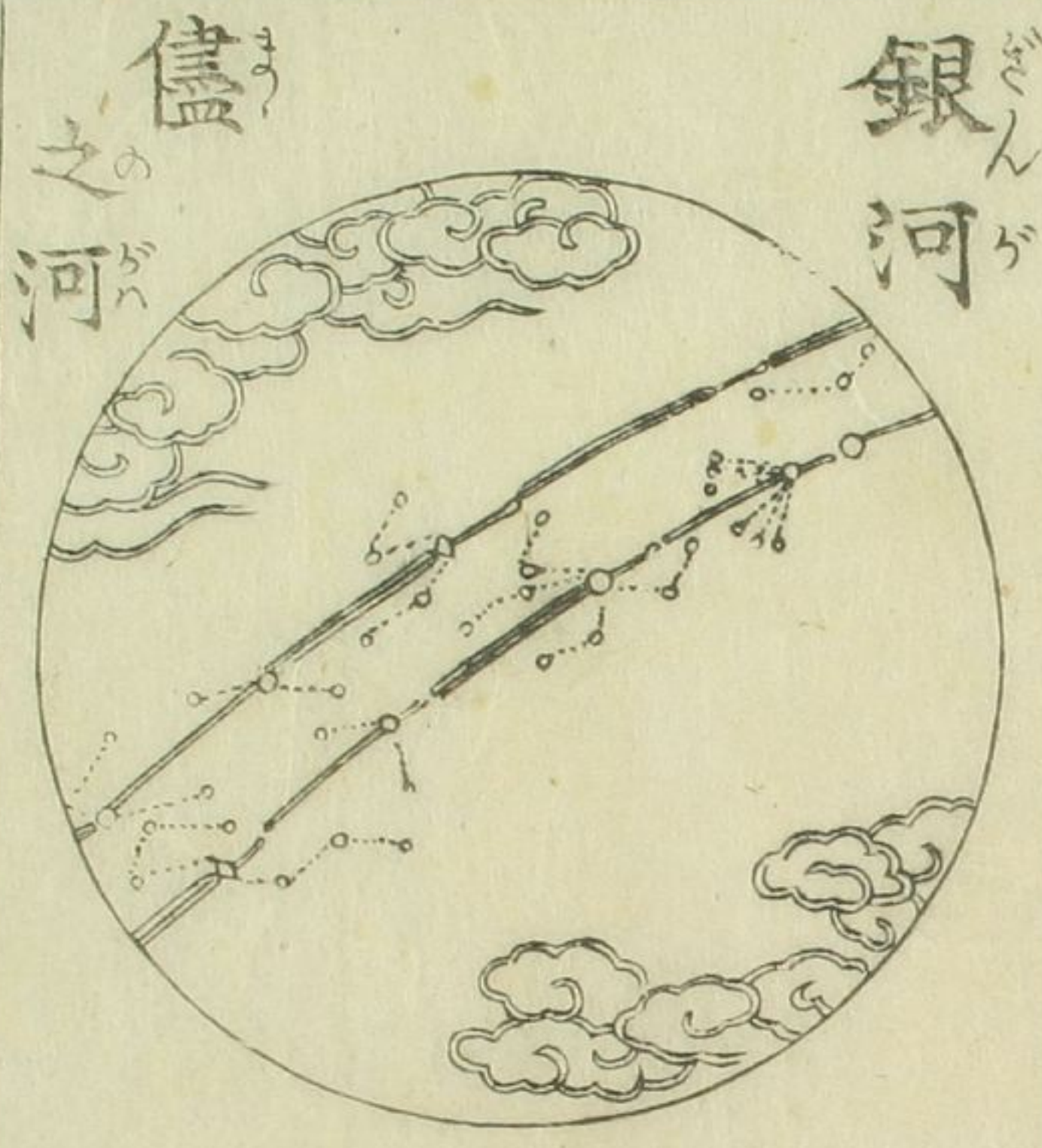
傘の内小客星の見ゆる夏あり是を相合傘と云又奴意
 闇と云客道小見ゆる日の笠ハ色おのく異ふして深淺大小有
 往古不二屋が伊左宵小見へとるハ編笠の如く是秋小至る
 夕霧の如れる故也

流星和名與波比
 保之是客星ハ
 有頂天小通夏その
 數と主ハ客星の傾

星を呼喚の義ふよりて呼喚星と云傾星小對する時客星の
 魂を天外に飛ぶが故に飛星の名あり前小説如く傾星ハ
 陽ハ一て金を主とする客星をその時湯のごとく
 ありて流るる夏音樓の蠟燭のごとく又人の涎に似たり故に
 流星と云史記劉向傳に流星有聲者為天狗星とあり
 是客星の中なる天狗星にてよく聲を發し慢心小暮
 惡稗星を云ふ一又奔星ハ奔と訓く利小暮一
 各齊星也

銀河ハ傾星天の上小あつて晝夜とも光りゆきて四面を

銀河



て一ユ面ありて時ハ
 七夜の七夜ハ趣く是を
 志む一の游とふ其あが
 る夏あびる一既ハ
 流るる至つて受夏あ
 りてア儘の河とつてゆハ

儘之河とも云片々と光を霏星と号く
 留星など其のむと

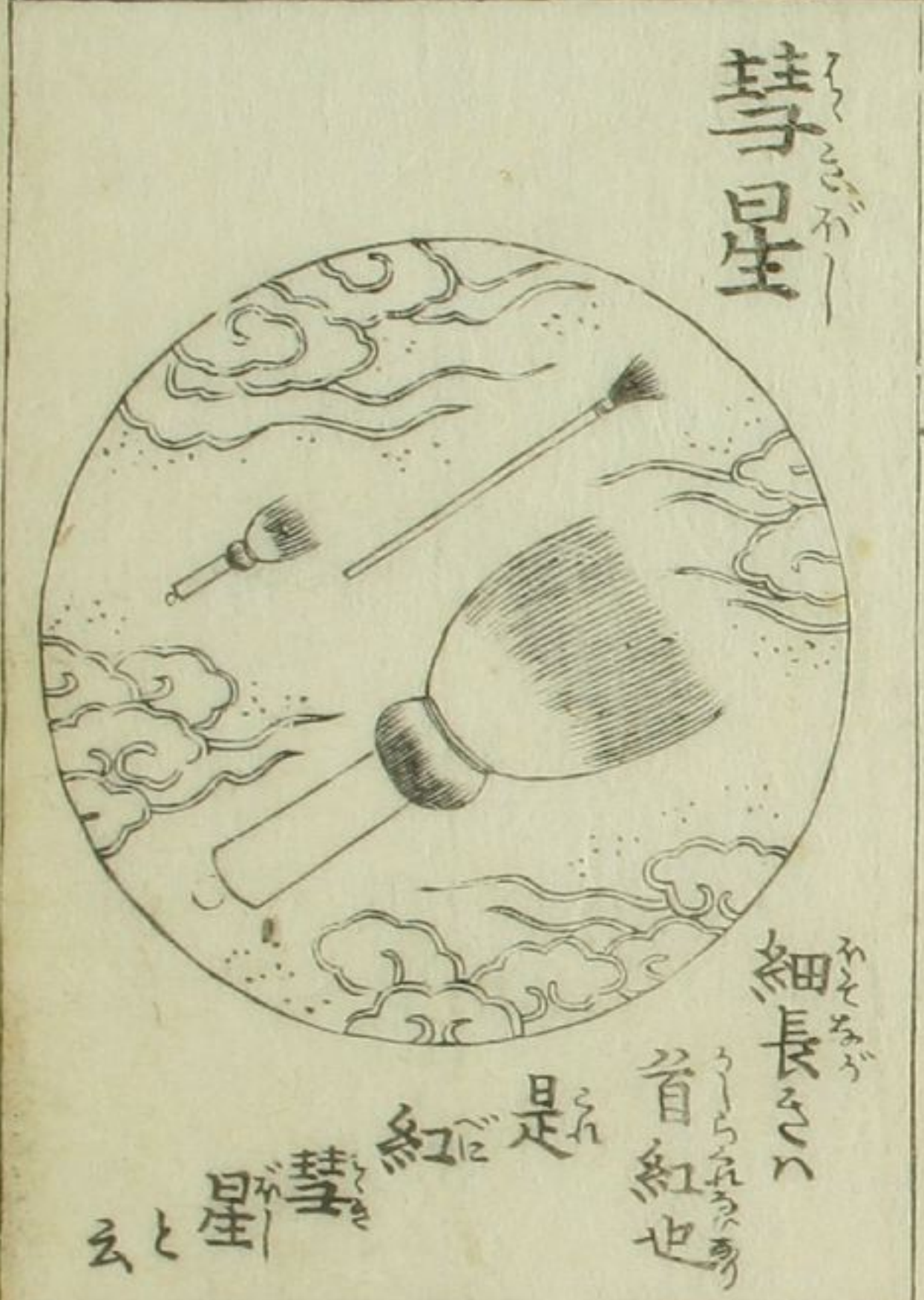
牽牛星俗々牽流星と書杯の遠とつて頃あつる時

敵女かたむすめ小對こたいして声こゑを發はらし一あり十の度とせう敷しきをりつゝ勝かち
 負まへを争あそふ故ゆゑ小以こい左さ加比星かひせいともいふ織女おほむすめハ敵女かたむすめ小對こたいして奉けん
 流りゅう小對こたいして杯さかづきをすめ衆星しゅうせいを宴ゆかりはぶさんと計はかりるゆへ小
 宴女ゆかりめともいふ星せい小圖こずを



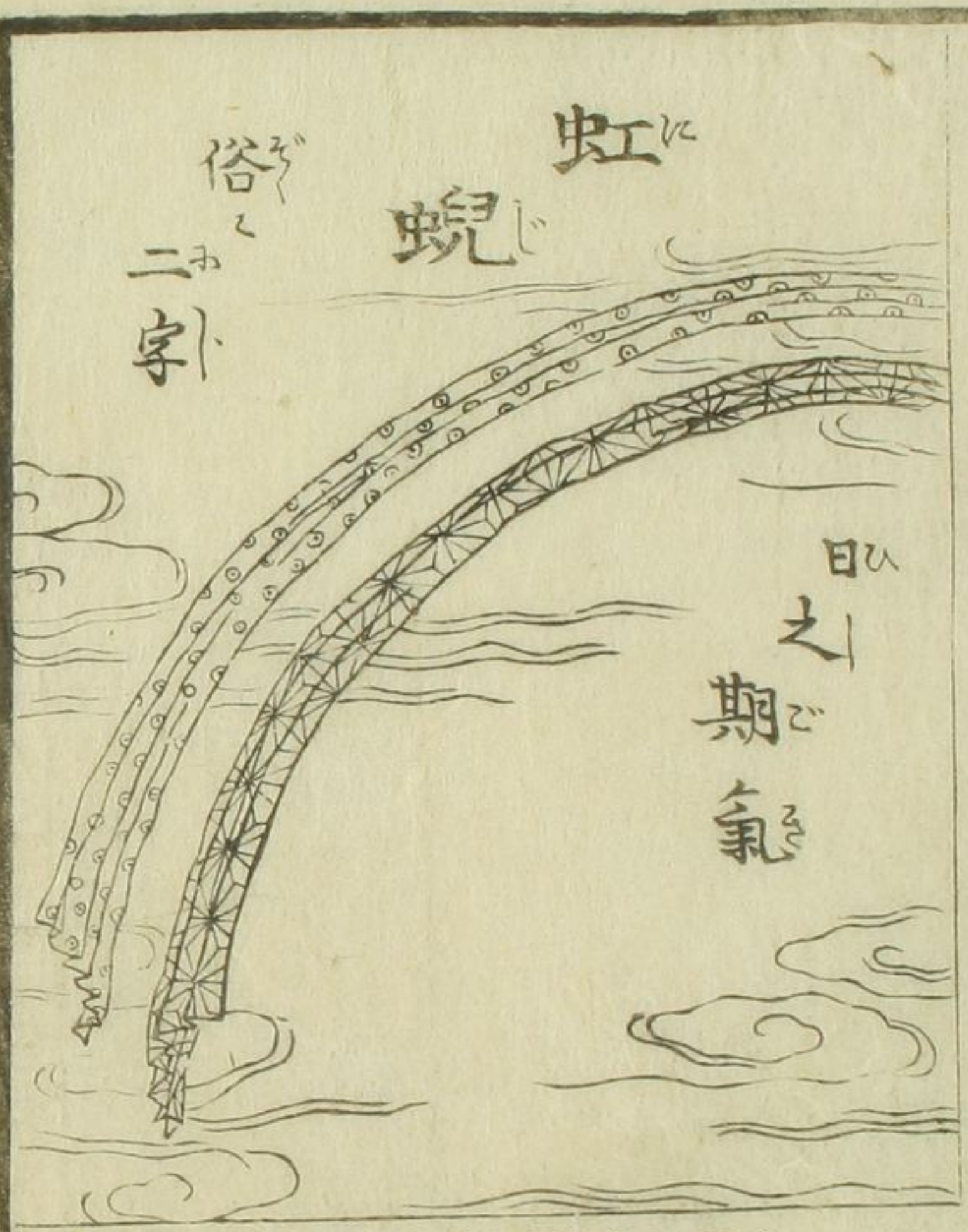
る取との銀河ぎんがとい異ことあり
 此奉流けんりゅう敵女かたむすめ小あり
 呑河つんがと名なけく其流そのりゅうと
 鉢水はちみづの如ごとく又酒さけのどし
 故ゆゑ小さくを流ながせと云い夏なつ

あり鵲うさぎのこゝとありて天河てんがを渡わたせとて説せつ有あり鵲うさぎの文字もじ鼻はな
 差宜さざい小對こたいして象ぞう梳しの弁ひんの如ごとく一席いせきの酣あはれ小出こでく飛とめぐる也なり
 一名いちめいを廻まわ鳥とり無な帝てい鳥とりと云い此鳥このとり有あり頂ちやう天てんへ昇のぼつゝ梯はしとあり
 故ゆゑ小鼻差宜はなさざいの梯はしとあり



左傳さでん云い天之有あり琴こ以も除を
 穢けが也なり若ごとく界かゝ小ハ晝ひる夜よ朝あさ
 暮ゆふ小山こやまて入い夏なつ掃はらあり其その
 光ひかりの白しろり又また黒くろ有あり象ぞう大おほ
 あり本竹もとたけのどし一ひと小ことあり

本白銀の光りやけり惣て穢を除きて新粧をまじる暗夜
 おして真黒あるも此星やてとも遠れば月夜のとも白斐し
 菊目ぢり斑星なる星木の西星とくも此光小棄れ



消るがごとく
 三才圖會云虹映日
 光之色爲紅緑也
 紅者火緑者水氣而
 爲水火之交故必向日
 方とあり紅ハ緑縮縮

あごのど〜緑あるは浅黄縮縮の如〜日之方小向ふて
 志どが如く見ゆる故日之期氣と云此氣頭る時ハすか
 りち水火の陰陽交合の志る〜と云此〜と云閨中解と雲と



雷

成雨と成巫山の夢を結
 故小是則色と情の二
 字あるべし
 ○天文の書云雷爲
 陽氣而屬火と有陽
 氣浮氣のあ〜塊

たる也あつちやんてん虚言あつちやん天あつちやん小あつちやん有あつちやんてあつちやん火あつちやんのあつちやんどあつちやんくあつちやんありあつちやん四あつちやん向あつちやんのあつちやん座あつちやんをあつちやんりあつちやんつあつちやんくあつちやん

太あつちやん鼓あつちやんをあつちやん推あつちやんいあつちやんりあつちやんあるあつちやん土あつちやん氣あつちやんのあつちやん有あつちやん者あつちやんもあつちやん風あつちやんのあつちやんどあつちやんくあつちやん小あつちやん昇あつちやん一あつちやん槌あつちやんであつちやん庭あつちやん

々あつちやん如あつちやんああつちやんらあつちやんゆあつちやん一あつちやん雷あつちやんとあつちやんもあつちやん云あつちやんりあつちやん礪あつちやんとあつちやん鳴あつちやんふあつちやんああつちやんらあつちやんぶあつちやんああつちやんらあつちやんくあつちやんとあつちやん云あつちやん也あつちやん

此あつちやん音あつちやんをあつちやんさあつちやんくあつちやん入あつちやん笑あつちやんをあつちやん催あつちやん一あつちやん胸あつちやんをあつちやん轉あつちやんるあつちやんゆあつちやんゆあつちやん一あつちやんふあつちやん雷あつちやん小あつちやん胸あつちやんをあつちやんとあつちやんら

ろあつちやんくあつちやんとあつちやん云あつちやん夏あつちやんありあつちやん世あつちやん小あつちやん霹あつちやん靨あつちやんとあつちやん一あつちやんもあつちやん是あつちやん霹あつちやん靨あつちやん小あつちやん兆あつちやんのあつちやん歴あつちやんくあつちやんの

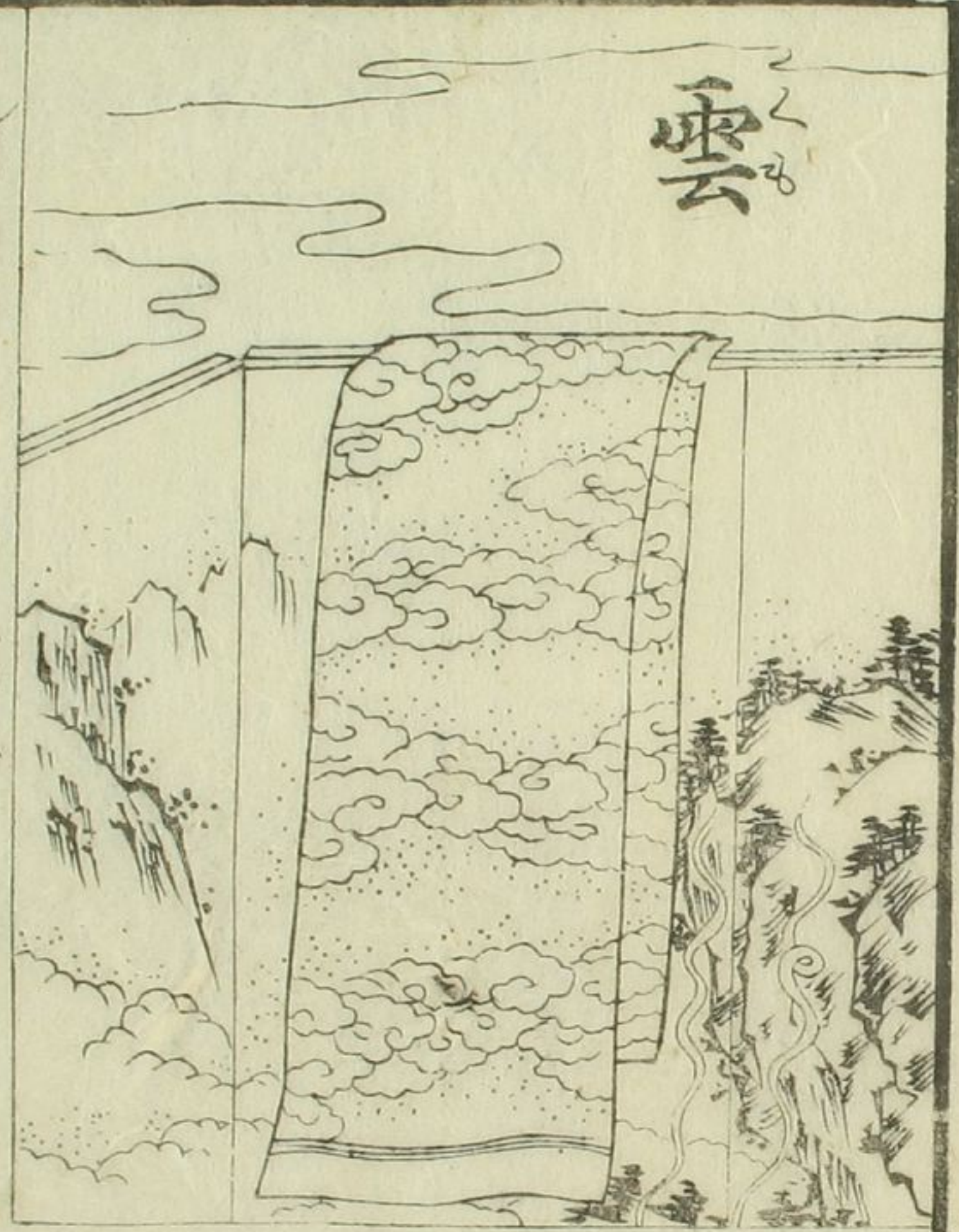
墮あつちやんらあつちやんるあつちやん者あつちやん也あつちやん後あつちやん漢あつちやんのあつちやん王あつちやん充あつちやんがあつちやん論あつちやん衡あつちやんとあつちやん一あつちやんるあつちやん書あつちやん曰あつちやん小あつちやん雷あつちやんのあつちやん形あつちやんをあつちやん圖あつちやん一あつちやんて

一あつちやんるあつちやん左あつちやん手あつちやん引あつちやん連あつちやん鼓あつちやん右あつちやん手あつちやん推あつちやん之あつちやん一あつちやんむあつちやんこあつちやん有あつちやん此あつちやん小あつちやん圖あつちやんをあつちやんりあつちやん左あつちやんの

手あつちやん小あつちやん鏡あつちやんをあつちやん持あつちやん右あつちやんのあつちやん手あつちやん小あつちやん長あつちやん鉤あつちやんをあつちやん携あつちやん一あつちやん爪あつちやんのあつちやん角あつちやんよりあつちやん生あつちやんじあつちやん圖あつちやんのあつちやん皮あつちやん

至あつちやんつあつちやんくあつちやん厚あつちやんくあつちやん野あつちやん良あつちやんのあつちやん草あつちやんのあつちやん積あつちやん鼻あつちやん禪あつちやんをあつちやんああつちやんらあつちやんとあつちやん者あつちやん也あつちやん

雲くも



近あつちやん世あつちやん其あつちやん尺あつちやんちあつちやんがあつちやんじあつちやん此あつちやん雲あつちやん屏あつちやん風あつちやんのあつちやん山あつちやん石あつちやん小あつちやんかあつちやんるあつちやん時あつちやん二あつちやん條あつちやんのあつちやん烟あつちやん立あつちやん是あつちやんをあつちやん烟あつちやん冊あつちやん雲あつちやんと

一あつちやん而あつちやん後あつちやん音あつちやん靜あつちやんああつちやんるあつちやん時あつちやん陰あつちやん陽あつちやん和あつちやん合あつちやんのあつちやん氣あつちやんをあつちやん發あつちやん其あつちやん中あつちやんにあつちやんて

空あつちやん泣あつちやんのあつちやん雨あつちやんをあつちやん催あつちやんまあつちやんそあつちやん有あつちやん大あつちやん盡あつちやん風あつちやんのあつちやん吹あつちやんるあつちやん有あつちやん曉あつちやん天あつちやん小あつちやん至あつちやんつあつちやんくあつちやん此あつちやん氣あつちやん

白あつちやん居あつちやん易あつちやんがあつちやん詩あつちやん小あつちやん白あつちやん雲あつちやん

帶あつちやん小あつちやん似あつちやんくあつちやん山あつちやんのあつちやん腰あつちやんをあつちやんめ

ぐるあつちやんとあつちやん云あつちやん一あつちやん呈あつちやん然あつちやんとあつちやんもあつちやん白あつちやん

雲あつちやんのあつちやん小あつちやん兆あつちやんのあつちやん五あつちやん色あつちやんその

外あつちやん流あつちやん行あつちやんのあつちやん色あつちやん有あつちやん大あつちやんさあつちやん

往あつちやん昔あつちやんハあつちやん天あつちやん小あつちやん定あつちやんマあつちやん一あつちやんが

既すなはち小こ去きんとするを惜あは夏なつ甚しくして客道きやくどう小半形こはんがたのやける
夏なつあり是これを朝霞あさぎりとよは是天氣てんきの損そんぶる基もと也又其また六氣りくき
凝固こうこて翌日あしたも雲うものくる有是ありを居い續つ雲うもと云



大風
盡風
雨
袖之時雨
空泣之雨



雲
肌之雲



甘露
露
花之露
瑠璃之露
露銀
杯之露

ア一ノ十

○陰かげ佃うし云い萬物ばんぶつ以もつ風動かぜうご以もつ風化かぜ牛馬うま見み風則走かぜ
人ひと戀風こいかぜの吹時ふくとき心こころの動うごをもらら頸筋けいじん寒さむくして身み中ちゆう
動うごき震ふるふと云い風かぜふさめく名な有あて其その數かず多おほく
客道きやくどうあり吹ふい。大盡おほじん風俗ふうぞくと金持かねもち風かぜと云い此風このかぜ至いたりぬし
否いな形風かたかぜ是こゝを客主きやくしゆと云い又否またいな嵐あらしと云い傾星かへんせいのひ出でる方かたあり
吹容主ふくやうしゆの風かぜ小こ的てきる者ものあり家いへを破やぶ後のちの青あお棒ぼうをてを
倒たふすまま又また京傳きやうでん子こ酒落しゆらくの書しよ小こ浮氣うき風吹かぜ鼻先はな先まへと云い
○雨あめの身みをしる雨あめと云い俗ぞく小こ空泣そらなの雨あめと云い是實こゝろ小こ降ふ夏なつ
すくぬき身みをしる空そら小こ降ふ雨あめ小こして陰かげふくく忽たち晴はる也なり世人よじん

此雨ふあひく袖をぬくと夏おびらく用慎して濡る
夏を忌むべし

○朱子云雪者水結爲花故六出これなるは河
竹の水を結く花の姿を見をとりあり此肌の雪ふらる
人主親の勅氣を受る夏甚し遠ざかりて積る夏
多し雪の肌のまろせざるを降と云ふ花よりハ昏日六
より盛みく暁六消る思ひとあり故ハ斯ハ号又銀
世界ハ銀あくく雪の肌を見夏難し故ハ銀世
界と云ふべし

○露ハ銀氣の塊たるを露銀と云客道より此露多し
降時下潤ふ夏甚し

○此花の露ハ本水あり秋硝子の小曇の如く其清き夏
露ハ小品あり東都よりて是を江戸の水とて瑠璃
露も又是ふ似く齒をこすに凍るるとの故是を葉ふとく
つゆと云

○甘露ハ杯の蔭魚の草花におく露也昔樓子登つと
杯の露をあげ初め酒を飲時甘露ありと云す
至つて其味をうりて

○愛ハ往昔音樓ヤク立人切十人切無理切あること
 有しんとも此世静謐ありし此夏ありし若有時の不景氣
 小して其地ふたろ夏有按るふ今時。是切。縁切。思切
 あごらる有るん軒ふるる霧くこする故霧こ云て
 兎角胸中の暗やぬ者あり

無飽三賊圖會一之巻終

アノ二

徳川

羽葉秀吉
八郎為助

黒白對決

徳川

浮遊

原田

黒日論

満洲

女嫌

浪遊

山嫌

